

清流 ニ ュ ー ズ

発行所
〒192-0904
八王子市子安町 1-22-25
清流寺
清流ニュース編集室

令和7年度総祈願

本年度教化誓願達成・学徒・教務員増加
日鏡上人五ヶ年報恩御奉公・御七回忌前年の年
寺内・境内整備ご有志継続・一口奉納御奉公推進
御利益談を語る信徒の育成・御講願主・御会式参詣者増加
お助行・御法門聴聞励行・御奉公内容充実・教講一同「利益感得

五月の御総講日

一日 十時 御修行日

七日 九時半 バースデー総講

十三日 十時 高祖御命日

十七日 十時 開導御命日

廿五日 十時 門祖御命日

於 清流寺

十六日 十時 開導御逮夜

廿四日 十時 門祖御逮夜

於 羽村別院

特別行事

十一日 十時三十分 開式

佛立第八世講有

当山草創日 歡上人御会式

晴天祈願

四日 (日) ～十日 (土)

第一座六時～七時半

第二座九時半～十時半

会議

一日 御総講後 役中会議

四日 午後一時 参事会

5月11日
10時30分

佛立第八世講有

当山草創 日歡上人御会式

奉修導師 福寿寺 御高職

かや もりにちじん
栢森 日尋 御化主

於羽村別院



第八世講有 日歡上人

本年の歡尊会は、久し
ぶりに他寺院の御導師を
奉修導師にお迎えして奉
修させていただきます。

栢森日尋御化主は、福
寿寺御高職のかたわら、
佛立教育専門学校教諭と
してご活躍されています。

さて、第八世日歡上人
は、明治廿七年(一八九四)
七月一日に第二世講有日

間上人より剃髪をうけ、
第四世講有日教上人を師
僧として得度されました。

当山は、この日歡上人
を、「当山草創」とお敬

い申し上げ、羽村別院発
足当初の昭和廿八年より、

年に一度、羽村別院に於
て、報恩謝徳の誠を捧げ

る志を顕し、歡尊会を奉
修させていただいており

ます。

日歡上人は、乗泉寺中
興開基(古いお寺を再興)

と尊称申し上げておりま
す。

当清流寺の本寺(親寺)

と申しますが、乗泉寺の
歴史は古く、江戸時代か
ら、本門法華宗の一寺院

として存在してありまし
た。

日歡上人は、御歳
三十三歳の御時、師僧、

日教上人の師命をうけ、
乗泉寺住職に就任されま

した。

ご住職に就任された当
時の乗泉寺は、寺とは名

ばかりで荒れ放題だった
といわれています。

前の住職は逐電(にげ
てゆくえをくらますこと)

してしまい無住状態(住

職がない)状態でした

から、本堂は雨漏りし、

畳はボロボロ、勿体なく

も内陣には単(ネズミ)

が入りし、御尊像のご

礼盤は、塔婆で打ちつけ、

想像を絶する状態でした。

このような状態の中を、

日歡上人は、毎朝三時

に起床され、七時迄には

一万遍の口唱を重ねられ、

旧檀家宅にも一軒一軒で

いねいにお助行をされま

した。

その熱意が、旧檀家に

も通じて、今度の住職は

やる気がある。朝参詣も、

二人、三人と増え、ご利

益も盛んに顯われるよう

になってご弘通が発展し

ていきました。

当時のご利益談をご紹

介致しますと、

日歡上人が、或る信者

宅にお助行に伺うと、丁

度、そのご信者宅に居合

わせた親類の人が病気で

苦しんでいるのをご覧に

なり、お折伏して、お題

しよう!明日から毎日お

助行に参ります。と申さ

れ、一週間を区切つての

詰め助行が始まりました。

ところが、病状は悪く

なるばかりです。それで

も日歡上人は、真剣なお

助行を続けられました。

五日目は、最悪の状態

でしたが、六日目にお助

行に伺いますと、ナント昨

日迄、苦しんでいた病人さ

んが、玄関でニコニコし

て上人をお出迎えしたの

です。

事情を聞くと、「昨日

お上人がお帰りになった

後、身体中の毒物がすべ

て出切つて、おかげ様で

スッカリ元気になりました

た」と話され、日歡上人は、

ご宝前に御礼の言上をさ

れたわけですが、「モウう

れしゅうて、うれしゅう

て涙が止まらなかった!」

とご法門でお話し下さつ

たのです。

この現証ご利益によつ

て、ご弘通が、グングン

と発展したのです。

私共もこの日歡上人の

ご信心をお手本とさせて

いただきます。